

都立 第五福竜丸展示館ニュース

2017.03.01
No.398

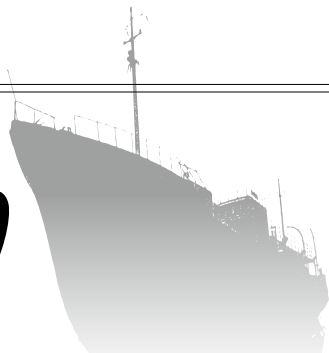
(3・4月号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会

連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



核戦争準備のなれの果て、核のゴミ捨て場・ルニットドーム。マーシャル諸島エニウェトク環礁への訪問記は、6面に掲載。撮影2017年1月16日



70年を記念して 福竜丸をつくる

この三月、第五福竜丸は建造から七〇年を迎えました。展示館の開館にあたり東京都は「木造船での近海漁業は現在でも行われていますが、当時はこのような船で遠くの海まで漁を求めて行ったのです……遠洋漁業に出ていた木造船を実物によって知っていた」と展示の趣旨を掲げています。

七〇年は、人であれば古稀です。木造船は本来二〇年前後の耐用年数ですが、「原水爆による惨事をふたたび起こさないように（都の展示趣旨）」との市民の願いをこめて、木造船の実物の保存が実現したのです。

今年、木造船・第五福竜丸を発信していく企画展示をすすめます。現在の「この船を知ろう」建造70年の航跡につづき六月からは、「第五福竜丸・木造船をつくる」（仮称）と題して、どのように船が造

られるのかをたどります。建造の地和歌山県古座（串本町）、練習船改修の旧強力造船（三重県伊勢市）などから資料の提供をうけ、船大工、研究者の協力で船造りの工程や船大工の技、大工道具などを展示します。

＊

「福竜丸だより」は来る七月号で四〇〇号を迎えます。展示館開館時の「福竜丸ニュース」「平和協会ニュース」に代わり一九七八年四月に「都立第五福竜丸展示館ニュース」を冠して刊行されました。福竜丸と来館者、展示館の模様や協会の取り組みをたどる貴重な積み重ねの記録です。今号は、「3・1ビキニ記念のつどい」でのフランスの核実験と被害について、講演録を収録。これからも皆さんと第五福竜丸をつなぐ「たより」として編集したいと思っています。

3・1ビキニ記念のつどい フランス核実験の 実情と被害

要は下段に収録。

真下さんは、大戦後のヨーロッパでのフランスの独自の政策・核の開発、旧植民地や仏領ポリネシアでの核実験と被害問題、その経緯と現状について説明しました。

つどいの後半では、安田和也協会事務局長がマーシャル諸島エニウエトク環礁への訪問の報告(6めん)、質疑では、太平洋核実験での人体実験について、仏本国での先住民や植民地での実験被害への取り組みの現状、ポリネシアで広がる若者の取組みなどについて寄せられました。

3・1ビキニ記念のつどいは二月二五日午後、東京スポーツ文化館で開かれ、四五人が参加しました。今年はフランスの核実験とその被害をテーマに同国の核政策を研究する真下俊樹さん(埼玉大学講師)が講演しました。

つどい冒頭、協会の山本義彦理事は、「核脅迫の世界へと舞い戻りするか動きがみられる今日……国際的な核被災への関心を持続させこの問題の意味を深く伝えることが重要です」と挨拶しました。つづいて「太平洋の核実験を概観する」と題してフォート・ジャーナリストの豊崎博光さんから報告をうけました(大



リネシア政府の核実験被害追跡調査委員会委員で武器輸出監視NGOのブリュノバリオさんのサポートのこと、放射線に関する学習についてモルロア・エ・タトゥが小中学校向けの副読本を昨年作り、配布するよう働きかけていることなどが紹介されました。

325回の 核実験被害

豊崎 博光

太平洋の島と人々とはかつてスペイン、ドイツ、日本、アメリカ、イギリスとフランスに統治されてきましたが暮らしに大きな影響はありませんでした。しかし第二次大戦後に統治を続けたアメリカ、イギリス、フランスは人々の存在を無視して核実験を行い、暮らしを破壊しました。

核実験は一九四六年から九六年までの半世紀間に三二五回行われました(一五〇回は地下実験)。総爆発威力約一七七メガトンを広島に投下された原爆の威力で換算する

と、毎年約二二六発分が爆発していたことになります。

島と海で行われた核実験の放射性降下物と放射性の霧や雨は島々の住民と太平洋で操業していた漁船の乗組員に降り落ち、世界各地に広がって地球被ばくをおこしたのです。核実験の結果、島のいくつかは消滅させられ、ヤシやパンノキの実などの食料と貴重な蛋白質源の魚を放射能に汚染されたため人々は従来の自給自足型の暮らしを破壊され、居住する島を失い移住を余儀なくさせられて、難民となり、他の島で暮らしを営むをえなくなったために故郷の島で育んだ独自の伝統や文化を失いました。

大国の統治が核実験と暮らしの破壊につながったとする人々は、七〇年代中頃から自立、独立と核実験に反対するだけでなく核兵器の貯蔵や配備、核廃棄物の処理、処分を禁止する「非核独立」運動を展開しました。

ミクロネシア連邦やパラオ共和国は非核憲法を制定してアメリカ統治から脱し、英仏共同統治から独立したバヌア

ツ共和国は非核国家を宣言、八五年八月六日には、太平洋の南半球全域を非核地帯とする「南太平洋非核地帯条約」を成立させました。

非核地帯条約の成立後も続いていたフランス領ポリネシアでの核実験は九六年一月に終了しましたが、フランスの統治は続いています。

太平洋での核実験が終了して二〇年以上が経ちましたがアメリカの核実験場とされたマーシャル諸島のビキニ環礁は、放射能除染作業が行われましたが人は住めません。エニウエトク環礁も除染されましたが、南部の島を除いて環礁北部に住むことはできません。英核実験のオーストラリア、マラリングも二回の除染作業が行われましたが、所有権がある先住民アボリジニの立ち入りは禁止のままです。

太平洋で行われた三二五回の核実験の放射性降下物や放射性の霧、雨は人々と島々に今なお影響を与え続け、影響は将来の世代にも及んでいます。核実験によるレガシー(負の遺産)は人々と島々をむしばみ続けているのです。

フランス核実験 被害者はいま 汚された太平洋の楽園――

真下俊樹

フランスのドゴール主義

第二次世界大戦終結後、フランスは東西どちらの陣営からも距離を置く「ドゴール主義」と呼ばれる独自外交路線を取ってきました。冷戦構造の狭間で、ソ連を仮想敵国としながらも中国と接近し、中東やアフリカ諸国とも緊密な関係を築き、核技術や武器などで利益を得てきました。そのためにフランスは核兵器の裏付けを必要としましたが、他国から技術供与を得られ



真下俊樹さん(左)と豊崎博光さん(右)

れなかったため、独自開発をせざるを得ませんでした。

原子力大国フランス

独自の核兵器開発はフランスの財政規模からすると大変な負担です。一九五〇年代の終わりから六〇年代の初めにかけては核開発費がGDPの六・七％にのぼりました。この財政的重圧を原子力で補う戦略が取られました。徹底的にコストダウンを図るために原発を量産した結果、フランスは国内の電力の七五％を原子力で賄っています。

原発や再処理などのプラント輸出も積極的に行っています。イランや中国への原発輸出、日本の六ヶ所村再処理工場もフランスの技術です。最近では第四世代原発「アストリッド」(高速炉)を開発していて、これにもんじゅ廃炉を決めた日本が共同開発を申し入れています。このように、

フランスは世界の原子力産業をリードし、その利益で独自核兵器開発の財源を確保してきたのです。

フランスの核実験

フランスは一九六〇年から六六年にかけて、サハラ砂漠のアルジェリア領で四回の大気圏核実験と一三回の地下核実験を行いました。その後仏領ポリネシアのモルロア環礁とファンガタウファ環礁で一九九六年まで大気圏、地下実験を実施。仏領ポリネシアでの総数は一九三回に上ります。

主要核保有国の核実験回数をみると、フランスは米ソに次いで多くなっています。保有核弾頭当たりの実験数が、他の保有国の三倍、八倍も多い。これはドゴール主義のもと自前で核開発をせざるを得なかったことの表れです。

仏領ポリネシアでの実験

フランスは実験場周辺に危険区域を設定し船舶や航空機の立ち入りを禁止しましたが、その区域内には有人の島が幾つもあります。約一〇〇キロ北のツレイア島には一三

〇人ほどの人びとが居住しており、仏国防省が出した放射性降下物の予想範囲にも含まれています。また実験場から一二〇キロ離れたタヒチへも放射能が流れ、住民が約五ミリシーベルト被ばくし、汚染された牛乳が回収されたこともあったことが公表されています。しかし、仏政府は一貫して「被害はない、フランスの核実験はクリーンだ」と主張してきました。

実験の参加要員は、フランス本国から約五万三〇〇〇人、他に約五〇〇から一万人が現地採用され土木工事や実験後のサンプル採取などにあたりました。両者の間には明らかなダブルスタンダードがあり、現地労働者は防護服やマスク、線量計が供与されず、Tシャツ短パン姿で作業に当たることが多くありました。フランス人に対しては実験場付近で採れた食物の食用が厳しく禁じられたのに対しポリネシア人には黙認されました。

住民の被害

ツレイア島民は大気圏核実

験の際、トタンとコンクリートブロックで作られた避難施設に三日間閉じ込められましたが、避難の理由は説明されませんでした。避難が終わると、子どもには飴やチョコレートが、大人には一五〇〇フランとワインが配られたそうです。核実験後に黄色い霧で島が覆われたという証言もあります。

国防機密の壁

被害者に関するデータも厳しく秘匿にされてきました。情報の開示を求めても国防機密を盾に断られます。実験要員が深刻な被ばくを受けた場合は、軍用機で本国の軍病院に運ばれて治療されましたが、検査結果は本人や家族にも開示されませんでした。現地住民にも放射線の危険性は知らされず、危険はないと広報されてきました。核実験について見聞きしたことを口外すると国防機密漏洩罪に問われると脅され、現在でも話さうとしない人が多くいます。

こうした理由から、ポリネシア住民は核実験の被害につ

(4めんにつづく)

③めんのつづき

いて長い沈黙を余儀なくされました。住民が放射線の健康被害について深刻に考え始めたきっかけは、一九八六年のチェルノブイリ原発事故でした。

沈黙を破った被害者たち

核実験とその健康被害について元核実験労働者が声を挙げ始めたのは一九九〇年代半ばになってからでした。現地のプロテスタント教会の依頼でオランダの社会学者が元核実験労働者の聞き取り調査を行ない、その報告書が『モルロアと私たち』と題する本の形で出版されました。この本を通して、沈黙の壁を破って被害の補償を求める元核実験労働者やその遺族が増えて行きました。

二〇〇一年には核実験被害者団体「モルロア・エ・タトゥ」(「モルロアと私たち」の意)がポリネシアで初めて結成されました。会員数は現在約四五〇〇人で、元労働者の大半が加入していることになりました。また同じ時期、フランス本国でも、軍人や官僚、技術



1995年にパペエテ市で行われた核実験反対のデモ

者として核実験に参加した人たちが「元核実験従事者協会(AVEN)」を結成しました。アルジェリアの被害者たちも団体を結成しました。二〇〇二年八月五日、広島で、これら三つの団体が初めて一堂に会して「仏核実験被害者国際会議」が開かれ、連携して仏政府に補償を求める運動を進めることを決めました。

公の場に出た仏核実験問題

補償請求のような民事訴訟では原告が自ら被害を立証しなければなりません。低線量被ばくによる健康被害を証明することは事実上不可能です。そのため、多くの被害者

が裁判で敗訴を余儀なくされてきましたが、二〇〇〇年台に入ると、健康障害が核実験と無関係であることを証明できない限り補償請求を認める判決が出るようになりました(日本の公害裁判と同じ考え方)。

二〇〇四年には仏領ポリネシアで反核独立派のオスカ・テマル氏が大統領に就任。核実験被害調査委員会を設置し、独自調査を行いました。

二〇〇七年にはアルジェリア政府の主催で「核実験被害者国際会議」が開催され、政府として仏核実験被害を問題にするようになりました。

国防機密の壁の中に封印されてきた仏核実験の被害が、公の場で問い直されるようになったのです。

補償法の成立

こうした動きに押されて、二〇一〇年一月、仏政府は「仏核実験被害の認知と補償に関する法律(モラン法)」を制定しました。限定的ですが被害者も法案の作成段階に参加しています。この法の中で仏政府が初めて核実験被害

の存在を認めたことは非常に大きな一歩でした。また、被害者の举证責任を一部免除する「推計的因果関係の原則」を採用しました。しかし、これには大きな抜け穴があります。補償の認定を行う「核実験被害者補償委員会(CIVEN)」は加害側である国防省が所管しています。一五万人といわれる補償対象者のうち、二〇一六年七月現在、補償申請は一〇四三件。このうち実際に補償が認められたのはわずか二〇件で、うちポリネシア人は七件というのが実態です。

次世代への継承

ポリネシアの被害者団体モルロア・エ・タトゥも高齢化が進み世代交代が課題になっていますが、ポリネシアの場合、世代間の継承は非常に上手いと言えます。若い人たちがこの問題を深刻に受け止め、独自に、また既存の団体と連携しながら自分たちで新しい運動を立ち上げています。学生グループがSNSやビデオ投稿を駆使して、二日間で二〇〇〇人規模

の集会を開催したこともあります。

二年前に若い世代を中心に結成された「193の会」(193はポリネシアで行われた核実験の総数)というグループは、離島も含め全ポリネシアの村々を回って被害についての討論会を開催しています。同時に、核実験被害について住民が意見表明をする機会を持つと国民投票を呼び掛ける署名運動を始め、半分で有権者の四分の一に当たる五万筆を集めました。

今後の展望

昨年七月、ポリネシア核実験五〇周年を記念する様々なイベントが行われました。そこで私が感じたのは若い人たちのエネルギーでした。ポリネシアの仏核実験被害者の権利回復の道はまだ遠いのが現状ですが、運動が始まってまだ二〇年ほどしかたっていない。運動はこれからが佳局であり、やるべきことはまだまだたくさんあります。日本からも様々な支援活動が計画されています。(ましもとしき/仏核問題研究者)

語りつぐ ビキニ

マーシャルの人びととの40年
島田 興生

② エニウエトク環礁から来た ヨシタローとチョビ夫妻

いつ出港するか分からない船を待ちながら、私たちは情報集めにマジユロを歩き回った。今までの私の記述では、ビキニやロンゲラップ訪問を試みたのは、私たちが初めてのような印象を与え兼ねないが、実際には、一九七二年二月には原水禁国民会議調査団（池山重朗氏ら七人）がロンゲラップ島の現地調査を目的にマジユロに来島。しかし、信託統治領政府に「観光ビザでの入域」を理由に渡航を拒否され、訪問は不発に終わるが、マジユロ在住の被ばく者

一四人の証言を集め、帰国している。また、私たちの来島前の七四年六月には、朝日新聞の土井全二郎記者が五〇日間もマジユロで便船を待ってビキニ渡航に成功。七月の朝日新聞に「死の島・ビキニ」と題する現地ルポと数回の連載を掲載している。

ダウンタウンの一角に、ビキニに続いて核実験場になったエニウエトク環礁の避難民四家族七〇人が五戸のバラック住宅で暮らしていた。エニウエトク島民は実験開始前の四七年一二月に、エニウエトク南西二三〇キロのウジェラン環礁に強制移住。エニウエトク環礁では、四八年から五八年まで四三回の原水爆実験が行われ、三つの島が蒸発。世界最初の水爆実験もここで行われた。

その集落で貝の手芸品を作っている女の子の写真を撮っていると、突然「コンニチワ」ときれいな日本語で話しかけられた。チョビ・エライサさん（四六歳）だった。夫のヨシタローさん（四六歳）ら一家で数年前に余りの不便さに耐えかねてウジェラン島から

マジユロに移住してきた。

チョビさんは、「エニウエトクは美しい島です。ヤシや魚がいっぱい獲れる。マジユロのように住み難い町を出て、早く島に帰りたい」。果たしてチョビさんのエニウエトクは美しい島のままだのか、私とその真実を知るのは二年後のことになる。

チョビさんが上手な日本語を話す事、夫のヨシタローさんや隣の主人の名がマサオさんと日本名だった事にその時は深く考えなかった。しかし、島民が使う日本語と日本名には日本時代に刻まれた日本人

への深い愛憎の感情が込められていた事に気づくのはずっと後のことだった。

七月一九日、マジユロに着いて九日目。気晴らしに海岸に泳ぎに行く。そこへ、前田さんが汗を拭き拭き探しにきた。ウジェラン島の急病人を迎えに船が急遽今夕出港することになったと言う。戻って来てビキニに再び出港するのは十日後になると言う。

「ぼくはマジユロで追うテーマがあるので、次の船まで残るが、君はどうする」。

ウジェラン島に行っても果たしてどうなるか。しかし、



水爆実験場となった故郷エニウエトク環礁を追われ流浪生活を送るチョビさん一家（左から2人目がチョビさん・マジユロ・1974）

ウジェラン島はチョビさんやヨシタローさんらが住み、エニウエトクから追われた疎開民が住んでいる島だ。一日か二日の停泊でも生活の片鱗が見られるかも知れない。

前田さんとは一時ここで別れることにして、十日分の食料を買いに町のスーパーに行き、ホテルでは買い置いた食料や薬品を二人分に分けた。

まだ強い日差しの中、汗だくになって港に着き、荷物を船室に入れてはつとしていると、人ごみをかき分けるようにして、前田さんが船に乗り込んで来た。「この船は一度出港すると、どこに行くか見当もつかないらしい。ウジェランから急にビキニに回されるかも知れない。俺も一緒に行く事にしたよ」。ビキニに行くのはこの船しかないから、船から絶対離れないことだと、私たちはまた一緒に旅が出来るのを喜び合った。（しまだ こうせい／フォト・ジャーナリスト）

【訂正】前号・本文12行目、ニューギニア島民で編成され、ニューギニア島で戦死した、に訂正します。

ルニット・ドームへの旅

人びとのくらしと核の影

安田 和也

一月一〇日〜一二日、マーシャル諸島を初めて訪問。うち六日間は一ニウエトク環礁住民が暮らす環礁の本島に滞在し核汚染土投棄のルニット・ドームも訪ねることができた。

一月一六日朝、ルニット・ドームにむかう。小型のボート二台に分乗し出港。波は静かだが真つ青な海原と波頭が陽の光にキラキラと輝く。環礁のラグーンは直径三〇キロ、外周八〇キロ、四〇の島からなる。連なる小島を見ながら二〇分ほどすすむと前方になにやら船が傾いている。なんと形状は船だがコンクリート造りで鉄部は茶色く錆び朽ちている。実験の施設で終了後に放置されたのか。青い海にまことに不釣り合いだ。

本島から一六キロ離れたルニット島が近づいてくる。写真などで見た「立ち入り禁止」KEEP OUTの看板は見当たらない。白い砂浜が美しい、濃い緑の木々と鮮や

かな対照をなして一番高いのは実のまたわなヤシの木。コンクリートの実験施設が草に覆われて半世紀余の歳月を感じさせる。

砂浜に船をよせて波打ち際にあがる。美しい浜だがゴミが落ちていて。ということは人が結構来ているのか。後で聞いたことだが、実験施設の通信ケーブルなどを掘り出してゴム管から銅線を外して売るといふ。一キロ一ドル。

*

減させた。豊崎博光さんのレポートでは、島の人は避難の艦船のうえで実験を観たが居住地のウージェラン島へもフォールアウトがあつたという。七八年からアメリカはエニウエトク本島とそれに連なる三つの島の表土を削り除染作業をすすめた。島の人が多く住む北部のエンジャビ島は除染されず、人びとはエニウエトク本島に八〇年四月に戻ることになった。

*

ドームへ向かう。低木の緑の間を縫うように進むと眼前にコンクリートのドームの円形が忽然とあらわれる。くすんだ灰色の表面ざらざらのヒビ割れたドームは米軍資料によると直径一〇〇メートル、コンクリの厚さ五〇センチ、海抜は八メートルという。ドーム下の縁の地面に円筒が五本ほど突き出している。直径は二〇センチ、高さ一メートルほど。ドームのコンクリートからも一本突き出している。内部の放射線を測定するために数年前に開けて埋め込んだパイプらしい。上部は塞がれていた。開いていたら怖い。頂上をめざす。

地球の赤道海域、白砂、コバルトブルーの海岸線の海、沖合は青い海原、その美しい島にコンクリートで覆われた人工構築物。ルニット・ドームの真上に立つ。空が広い。向こう側の海にもう一つのクレーターらしい円弧が海水を満たして小さな池のようだ。当初の、二つのクレーターに汚染された土壌をコンクリと混ぜて投棄し使用済み機材とともに埋めるという計画に対し米議会は五千万ドルの予算のうちの約半分しか認めなかったという。廃棄場所は一カ所に、かつクレーターの底のコンクリ打ちもなくなりそのまま埋設したという。放射能は海に漏れるのでは、と懸念が広がる。除染は十分におこなわれたのだろうか。

*

元原研技師の手伝いをしながらドームの頂上と下のコンクリと土の境目あたり東西南北の四カ所の線量を測定。ドームの上を歩くと最初は感じなかったがものすごく暑い。日差しが強いので汗びっしょりになる。突然の疲労感におそわれ、測るときはコンクリに腰を下ろしてしまった。

ワシントンからの通信①

オバマの広島訪問と
謝罪問題

樋口 敏広

昨年5月27日、バラク・オバマが現職の米国大統領として

て初めて公式に広島を訪問した。当時、アメリカでは国論を二分する大統領選が行われていたが、主要政党とメディアはこの訪問を好意的に評価した。しかし、それは主に日米和解の証として捉えられ、原爆投下に対する謝罪の必要性が正面から論じられることは皆無であった。オバマの広島訪問の「成功」は、むしろ原爆投下に関するアメリカの「神話」、すなわち原爆が終戦をもたらした、現在の日米友好

につながったとの通説を一層強化したと言えよう。では、将来のアメリカ外交を担う若者は原爆投下をめぐる歴史と記憶をどのように考えているのか。昨秋、私は大学一年生向けのゼミでオバマの広島訪問をとりあげた。驚いたことに多くの学生は謝罪問題を原爆投下の必要性や人道的影響といった従来の論点だけでなく、加害者としての歴史を否定する現在の世界的な潮流の一環として論じてい

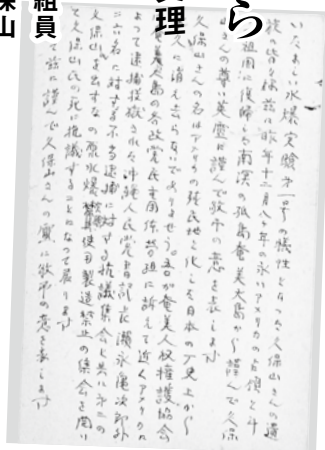
た。ある学生は、日米両国が負の遺産を常に直視し謝罪し続けられない限り、加害と犠牲の上に成りたっている自国を盲目的に肯定する思想が若者の間で台頭する、とその危険を指摘した。

事実、アメリカでも先住民征服と奴隷制の過去と現在まで続く構造的暴力の存在を忘却し、自国を無条件に礼賛する歴史修正主義が高まっている。アメリカの多様性の象徴として登場したオバマ大統領

*本コラムは毎号連載します。

一通の手紙から

市田 真理



入院中の第五福竜丸乗組員たちへ、昏睡状態の久保山愛吉さんへ、遺族へ。...

奄美大島・名瀬局消印のハガキが二通あります。一通は久保山愛吉さん死去の報を受

けてすぐにしたためられたと思われる九月二五日消印。もう一通は焼津で行われた漁民葬に宛てた、奄美人権擁護協会からのものです（一〇月九日消印）。前年一二月に「復帰」を果たしたばかりの奄美では、未だ米施政下にある沖縄

に連帯し、「逮捕投獄された沖縄人民党書記長、瀬長亀次郎外二六名に対する不当逮捕に対する抗議集会と共に、第二の久保山氏を出すな」の原水爆実験使用製造禁止の集会を開いて、久保山氏の死に抗議することになっております」とあります。この集会については詳細不明です。

九月二三日、久保山さん死去のニュースは、電力供給が不安定だった奄美大島のラジオからも流れたのでしょうか。それとも新聞報道で知ったのでしょうか。「罪なき生

山下哲雄さんと家族



命を、...人類滅亡の死の灰、のろはしき哉」と止むにやまれぬ思いがほとばしるような筆致で書いたのは山下哲雄さんです。

奄美大島笠利にお住まいの哲雄さんの姪・近藤みち子さんを訪ね、お話をうかがいました。哲雄さんはシベリアに

四年近く抑留され、毛皮の帽子を抱えて奄美に帰ってきた姿をよく覚えていたとのことでした。その過酷な戦争・戦後の体験が、久保山さんの遺族へ筆を走らせずにはいられなかったのだと思います。

奄美では原水爆禁止署名運動にもいち早く取り組みが行われ、短期間に九万人を超える人が署名をしています。戦争体験と戦後のアメリカによる統治、飢餓、復帰闘争が奄美の人たちの平和への思い熱く駆り立てたのでした。

（いちだまり 学芸員）

紙芝居「ばらの祈り～久保山愛吉・すずの物語」の英語版 DVD 制作！

核兵器禁止・廃絶条約の交渉会議が国連本部で3月と6月に開かれます。グローバルな核廃絶運動を一層広げることが求められています。第五福竜丸事件を海外にも知らせたいと、静岡県の有志が共同で紙芝居「ばらの祈り～久保山愛吉・すずの物語～」の英語音声 DVD を制作しました。

世界中に知らせたい！

紙芝居は、飯塚利弘著「死の灰を越えて」（かもがわ出版）を元に、佐々木悦子さんと矢部正美さんが2014年に制作したものです。私がその英訳を思い立ったのは、2015年核不拡散条約再検討会議に向けた平和行動（NPT行動）に参加を決めたときです。NPT行動参加は3度目ですが、ビキニ水爆被災の訴えが弱いと感じてきたし、2010年に参加した第五福竜丸元乗組員大石又七さんが「ビキニ水爆被災・第五福竜丸のことを知っているアメリカ人はほとんどいない」とがっかりしているのを見ていたからです。また、2014年秋に来日したアメリカ人ジャーナリストとカメラマンに出会ったことも大きな動機です。彼らは「インターネットで偶然第五福竜丸事件のことを知った。こんなひどいことがあったとは、自分だけでなく多くのアメリカ人は知らない。ドキュメンタリー映画を作って知らせたい。」と言って制作に励んでいます。（2018年公開予定）

静岡の仲間とともに

第五福竜丸の母港・焼津のある静岡県から発信しなければと思い、紙芝居の英訳に取り組みました。英訳は新英語教育研究会の長田寿和子さん、校閲は Keith Reimink（アメリカ人ドキュ

メンタリー映画制作者）にお願いしました。

2015年のNPT行動では、英訳紙芝居を持って行きました。絵と英文コピーをファイルに入れて、ボストンの高校をはじめ平和活動をしている人たちにプレゼントしてきました。上演の機会はわずかしかなかったのが残念ではありません。

2016年1月、新英研東海ブロック研究集会 in 三重で紙芝居上演の機会を作ってもらいました。絵をプロジェクターで映写し、静岡支部メンバーが愛吉さん・すずさん・みや子ちゃんと配役を決めて英語で上演しました。

DVD を広めます

「ユーチューブにアップすれば世界中の人が見ることができるよ。」との



言葉に励まされ、まずDVDを制作することにしました。支部学習会の時、喫茶店でICレコーダーに録音。その後、ITに強い若いK先生が編集し、紙芝居制作者の佐々木さんと矢部さんが演奏する「樹音（じゅね）」の曲を取り込んでもらいました。

2107年1月、名古屋で行われた新英研東海ブロック研究集会が初公開となり、50人余の先生たちに見てもらいました。またアメリカ・ドイツの友人に送ったところ大変喜ばれました。（かすや たかこ・賛助会員）
DVD 申し込み・粕谷たか子
Eメール takako-k.521@cy.tnc.ne.jp
TEL / FAX 0547-37-3563

「軍縮の人」にマーシャル元外相

2016年の「軍縮の人」にマーシャル諸島共和国元外務大臣トニー・デブルム氏が選ばれました。



「軍縮の人」は、米国のシンクタンク軍備管理協会（ACA）が主宰し、その年に軍縮や軍備管理の分野で最も功績を残した人物・団体を選ぶものです。

マーシャル諸島は2014年に核不拡散条約にもとづく核軍縮義務の履行を求め核兵器保有国を国際司法裁判所（ICJ）に提訴。昨年、英印パ3か国に対して訴訟手続きが開始されましたが、いずれもICJで取扱う権限がないとして審議が進まないまま裁判は終結しました。デブルム氏はこれらの訴訟を主導し、世界中で500万筆を超える賛同署名を集めるなど注目を集めました。

なお、2015年の「軍縮の人」にはカナダ在住の被爆者、サーロー節子さんと「広島・長崎の被爆者たち」が選ばれています。

ご 報 告

昨年秋の久保山忌句会にて第五福竜丸平和協会「船員賞」に選ばれた飯田史朗氏の作品「愛吉の歯ぎしりの雨石榴落つ」が、第31回久保山忌句会の「船員賞」作品と類似しているため、句会実行委員会（新俳句人連盟、原爆忌東京俳句大会実行委員会、第五福竜丸平和協会）にて検討し受賞を取り消すことにいたしました。ご報告します。